

「タイ・チュラーロンコーン大学サマープログラム 2019 派遣参加報告書」

京都大学文学部 2 年 清池祥野

タイ・チュラーロンコーン大学サマープログラム 2019 に参加してタイへ実際に行き、大学でタイについて色々なことを学んだり、様々な場所へ行ったり、タイ人と交流したりすることで、たくさんの事を学びました。そしてその学んだことは私に様々な変化をもたらしました。

まずはじめにタイ語についてです。私は前期にタイ語の授業を履修していたので簡単なタイ語なら話すことができると思っていたし、理解できると思っていました。けれど現実はそんなに甘くはありませんでした。はじめは勉強したはずのタイ語は瞬時に口から出てこず、タイ人が話すタイ語は時々知っている単語がわかる程度でした。しかしたった2週間ではありますが、大学で様々なタイ語の表現を学んだり、タイ人に日常で使う簡単なタイ語やスラングなどを教わったり、電車やデパートなど街中にあふれるタイ語に触れたりする中で、最初に比べたら格段にタイ語を聞き取ることができるようになったし、知っているタイ語も増えました。言語学習において実際に現地に行ってみるという経験は非常に重要だと言われますが、まさにその通りだと実感しました。また実際にタイに行くことで今まで以上にタイ語に関心が湧き、「タイ文字を読めるようになりたい」「タイでできた友人とタイ語でもっと会話してみたい」「もっと多くの表現を知りたい」などと思うようになり、タイ語学習へのモチベーションも高まりました。

次にタイの文化に対する理解です。タイでは日本にはない文化が数多くありました。私が特にタイの文化を感じたのは食事の時です。まず、日本では食事を食べる前には「いただきます」食べ終わると「ごちそうさま」と言うのがあたりまえですが、タイにはそのような風習はありません。また、食事を食べる時日本人は普通箸、食事によってはナイフとフォークを使いますが、タイでは右手にスプーン、左手にフォークを持って食べるのが普通です。そして特に驚いたのは食事をみんなで分け合って食べる時日本では最後の一つを「遠慮の塊」として食べたがらない傾向にありますが、タイでは最後に残った一つを食べると美人な彼女、イケメンな彼氏ができると言われていてみんな必死に食べようすることです。食事一つとっても日本とタイには全く違う文化が根付いていてとても興味深く思いました。

最後に将来の進路についてです。私が高校生の頃、自分は一生日本で働いて日本で暮らしていくのだろうな、と漠然と考えていました。その頃は外国というものが自分とは縁のないもののように感じていたからです。けれど大学生になりタイへ行って見て、外国というものが意外と身近な存在であることを実感し、外国に対する興味が大きくなりました。そして今では高校生の頃とは打って変わって外国で働いてみたいと思うようになりました。このように今までよりも視野を広げ、自分の将来に対する考えを変化させることができたのは、このプログラムに参加したおかげだと思います。

たかが2週間、されど2週間。私はタイで過ごした2週間で様々なことを経験し、感じ、知る事ができました。そしてそれは私の人生においてとても重要なものであったと思います。このプログラムで得た経験を元にさらにタイについて、ひいては世界中の国々について好奇心を持ち探究していきたいと思うし、そうすることで現状の自分の知識、価値観に満足せず、まだ自分が知らない知識や価値観を持つことができれば良いと思います。